

項目	自己評価	中・長期経営目標	短期経営目標	主 な 取 組 内 容	取組内容の評価指標	達成状況	改善方策	学校関係者評価	学校関係者評価
確かな学力（探究）	B	よく考え・工夫する児童の育成	基礎学力の定着と「聴く・考える・伝え合う」力の育成	学力向上のための組織的な校内研修体制づくり	○コンサル派遣事業を活用した取組全体のマネジメント ○主幹教諭によるミドルアップマネジメント ○保護者、地域住民への広報活動	(1)学校評価アンケートで、 ・「学校経営計画を意識して自己目標の決定を行っている」と回答する教職員…100% (77.1%) ・「情報発信を積極的に行っている」と回答する保護者…80%以上 (84.6%)	1)学校評価アンケートで、 ▼「学校経営計画を意識して自己目標の決定を行っている」と回答する教職員は自己目標シートとの連駕があるので100%だが、1年を通してそれを意識して実践できたかは64% (77.1%) ▼「情報発信を積極的に行っている」と回答する保護者…68.5% (84.6%)	学校経営計画を意識して自己目標の決定を行っている教員は、自己目標シートをみてもすべての教員ができていた。しかし、それが計画通り実行できているかどうかについて、子どもの状況から実感を得ることができなかったと思われる。次の点を改善する ①指標を絞り込み、教員の目的意識をシンプルに。 ②各部会ですべき内容を厳選する。	A
				子どもにわかる授業づくり(授業づくりスタンダードの活用など)	○基礎・基本の確実な習得に向けた取組(授業、補充的な指導) ○思考力、判断力、表現力を育てる取組(授業づくり) ○探究的な授業づくり ○小中連携での研究組織で身につける力の系統表作成	(1)各種学力調査全国より+3P (2)評定1の児童15%台に(3～6年) (3)単元テスト平均80…70%以上 (41.6%) (4)探求型授業のふりかえり調査 理由・発表:1・2年:75%以上 3～6年:70%以上 3～6年:70%以上	▼(1)各種学力調査全国より+3P ▼(2)評定1の児童15%台に(3～6年):26% ③単元テスト平均80…70%以上 (41.6%) 算数:○1年:92.8○2年:80.9 ○3年:84.5 ▼4年:78.3▼5年:75.2 ▼6年:75.1 4)探求型授業のふりかえり調査 ▼理由・発表:1年:77.5% 2年:72% 3年:69% 4年:65% 5年:78% 6年60% ○学んだこと:1年:95.9% 2年:82% 3年:78% 4年:87% 5年:89% 6年82%	学力的には依然として厳しい状況にある。「授業Basic」をもとに「授業改善」をしてきた。 ・教職員の年齢構成の二極化がますます進んできたので、学年間で教材研究をし、交流しあうよう努力していく。 ・探究的な授業づくりをさらに進める。特に、児童は、話し合い活動を通して自分の考えを深めたり、発表したりすることが苦手である。「話し合い活動」「話す・聞く」に関する教材の系統を研修したので、それらを授業の中で生かしていく。 ・単元末テストの平均が悪かった単元は、屋学習や宿題等で復習をしていく。 ・特別支援教育の視点を生かしたユニバーサルデザインの授業づくりを今後も続けていく。	
				学校全体で予習・復習(宿題)の質と量を高める取組	○予習－授業(発言)－復習のサイクル化が図られる取組(授業) ○PTAと連携を図った生活・学習習慣の改善を図る取組 ○算数教科書チェックで克服ポイントを明確に	(1)児童の意識調査で、 ・「予習をしている」と回答する児童…75%以上 (80.7%) ・「復習をしている」と回答する児童…85%以上 (89.5%) (2)算数教科書チェックの確認年3回	1)児童の意識調査で、 ・「予習をしている」と回答する児童…75%以上 ・「復習をしている」と回答する児童…85%以上 ※ここは指標が変わり、全国学力調査のデータで経年比較した。全国学力調査の質問紙では、予習、復習とも強い肯定的意見が全国平均を上回っている。ただし、家で家庭学習をしているという項目に関しては全国平均より大きく下回る。教科書チェックはできなかった。	家庭環境的にも厳しい環境にいる児童が多く宿題の提出率が伸びてこない。 ・家庭学習でつづ力をあきらかにして定期的にチェック。 ・山田高校生との全校力加力学習を充実させる。(学年の加力学習を嫌がる児童が、進んで参加している姿が見られる。また、自分の担任学年以外の児童も見ること、児童とのつながりができたり、系統性が分かったりする。)	
図書館教育	A	よく考え・工夫する児童の育成 仲よく、協力できる児童の育成	本好きな子どもの育成	○学校図書館を活用した各教科の授業の研究 ・図書資料の活用、新聞の書き写し ○読書指導の充実を図る。 ・並行読書の取組(各教科との関連を図った読書) ・「親子読書」や「ペア読書」、「読書山のぼり」や「読書まつり」の実施 ○読書・言語環境を整える取り組み ○地域に開かれた学校図書館の取組の実施 ・「読書ボランティア」「読書サークル」の活動 ・市立図書館との連携	(1)学校図書館を活用した授業が国語科、国語科以外の他教科で学期に1回以上実施できる。 (2)読み聞かせボランティアの登録者数…40名以上 (41名)	○(1)学校図書館を活用した授業が国語科、国語科以外の他教科で学期に1回以上実施できる。 1年:4回 2年:4回 3年:4回 4年:4回 5年:3回 6年:3回 ○(2)読み聞かせボランティアの登録者数…45名 (41名)	○「探究型の授業」の研究における児童アンケートでも「図書の本や新聞などを使って調べたり話し合ったりする学習を行うことができた」が2.5Pから2.9Pへの大幅に伸びており、図書館活用が意識されてきている。 改善点としては以下の3点があげられる ①各学年でつづなければならない力を意識した図書館活用の指導に取り組む。 ②今年度行った図書館活用年間計画の見直しを基に活用に取り組む。 ③情報図書館としての環境の整備に取り組む。	本年は、学校図書館を活用した授業の開催を目標に取り組まれており、成果においても全学年で着実に実施されていることは素晴らしいと思う。特に、前項の「探究型の授業」の研究を図書館と結び付けて実施しており、効果も上がってきているように思う。引き続きの取り組みを望む。 私的には、我々委員に「読書山のぼり」等で「こんな読書好きな児童がいます」のような指標が見せて頂ければ良いのにとと思う。	S
豊かな心	B	仲よく、協力できる児童の育成	しなやかな心の育成	○具体的な生活場面に繋がる道徳指導の研究。(やまだつ子のおやくそく:規範意識) ○道徳年間指導計画の系統性の見直し ○縦割り班活動の活性化を図る。 ○委員会を中心にOMOIYARI運動(道徳的な実践活動)を組織的、計画的に実施する。 ○OMOIYARI運動(児童会活動)を通して、人との関わりの中で仲間や周りの人を大切にする心を育てる。(いじめ防止の取り組み)	(1)児童の意識調査で、 ・「道徳の時間が好き」…85%以上 (79.8%) ・「自分にはよいところがある」…80%以上 (78.2%) ・「きまりを守っている」童…90%以上 (90.7%) ・「あいさつをしている」…90%以上 (87.0%) ・「将来の夢や目標がある」…90%以上 (87.5%) (2)要支援群児童数の削減…全体の5%以下 (4.4%) (3)「学級不満足群」「非承認」が40%以下	1)学校評価の調査で、 ▼「道徳の時間が好き」…67.7% (79.8%) ○「自分にはよいところがある」…85.0% (78.2%) ?「きまりを守っている」…90% (90.7%) ▼「あいさつをしている」…69.7%以上 (87.0%) ▼「将来の夢や目標がある」…71.9%以上 (87.5%) ▼(2)要支援群児童数の削減…8.4% (4.4%) ▼(3)「学級不満足群」「非承認」:53% (47.3%)	評価項目の数値が目標準を下回っている原因は、1学期から2学期にかけて学校が全体的に落ち着いたことになった事であると考える。改善には、安心安全な学級づくりが必須だと考えるので、年度当初の学級経営に関する研修を行い、学級づくりから改善を図りたい。 あいさつに関しては、漠然としたあいさつではなく、時期を限定したあいさつについて、学校全体で取組み、意識を高める。 道徳は、本校の児童の特性なども考慮し、興味をもつような資料の選定と読み物教材以外の資料も取り入れていく。 夢は、「探究的な授業づくり教育課程研究」に取り組む中で、地域の人やモノの素晴らしさに触れる授業を計画で、児童の意欲や関心を高める必要がある。	児童へのアンケートにおいて、学校の目標・昨年の結果・今年の結果を比較し、客観的な評価をした場合、目標が高過ぎるかも知れないが目標達成の項目が少ないように思う。特にあいさつに関しては、あいさつする児童側の意識の数字が下がっているのが問題だと思う。児童に自発的に運動として取り組ませ、学校からあいさつの意義を教えるアプローチが必要ではないかとの意見が委員から出た。 一方、自尊感情と規範意識は、目標達成できており、それを踏み台に児童の心を豊かにする取り組みを今後行ってもらいたいと思う。	B
健やかな体	B	明るく元気な児童の育成	体を動かすことが好きな子どもの育成	○教科体育の指導の充実を図る。 ・系統的な指導計画に基づいた授業 ・学年ごとの到達目標 ・全力走の継続実施 ○「体幹」「主運動」を鍛える ・授業開始5分 ・環境づくり ○外遊びを奨励する。 ○早寝、早起き、朝ごはん運動に継続して取り組む。 ○ゲストティーチャーによる保健指導	(1)体力調査結果…県平均と同等かそれ以上 (2)ED評価の児童の割合…男女とも15%以下(男子18.9%、女子10.4%) (3)50m走のタイム……全国平均と同等かそれ以上 (4)「体幹」「主運動」を鍛えるサーキット実施 (5)児童の意識調査で、 ・「毎日1時間以上運動する」と回答する児童…85%以上 (73.7%) ・「体を動かすことが好き」と回答する児童…90%以上 (91.2%) ・「外遊びが好き」と回答する児童…95%以上 (91.2%) (6)生活ががんばりカードで「がんばり賞」になる…55%以上 (40.7%)	1)体力調査結果…県平均と同等かそれ以上 ▼(2)ED評価の児童の割合… (男子42.8%、女子33.1%) ③50m走のタイム……全国平均と同等かそれ以上 ○(4)「体幹」「主運動」を鍛えるサーキット実施 ○(5)児童の意識調査で、 ▼「毎日1時間以上運動する」…67.6% (73.7%) ▽「体を動かすことが好き」…89.4%以上 (91.2%) ▽「外遊びが好き」…88.1%以上 (91.2%) ▽(6)生活ががんばりカードで「がんばり賞」になる…55%以上 (40.7%) 1学期生活ががんばりカード「がんばり賞」…56% 2学期生活ががんばりカード「がんばり賞」…44%	体力テストの時期を少し遅らせ、計測の行い方を教職員全員で確認する。また、屋体で計測していた「立ち幅跳び」は、外で計測することを検討する。 体育の授業の始めには、準備運動や慣れの運動としてリズム運動を取り入れていく。5分ででき、教室でもできる運動から、からだ部で講習を行い各学級で取り組めるよう推奨していく。 生活ががんばり習慣がマンネリ化している傾向がある。取り組む前に、集会で委員会から生活習慣について提案をしたり、各学級で生活習慣について指導を入れてから取り組ませる必要がある。 体育の授業で単元を決めて、学習カードを使った授業を学期に1回はする。	学校の目標に関して、体力調査の結果は全国平均並みで良好な成果を得ていると思う。また、児童の意識調査は、昨年と比べても少し下がってきてはいるが、概ね運動が好きな児童が多く体をを使った遊びができていている児童が多くいることは評価できると思う。 一方で、生活ががんばりカードの取り組みが年々低下している。家庭と協調した取り組みが必要な項目が並んでおり、児童が「がんばり賞」を取るためには家庭の協力が不可欠なものだと思う。したがって、何か新しい取り組み及び見直しを考える時期に来ているのではないかとと思う。	B
保護者地域との連携	B	信頼される学校づくりの推進	保護者や地域住民と連携を図った教育の充実	○コミュニティ・スクール開設準備会 ・組織の在り方 ・県外視察研修 ・校内研修 ・学校支援地域本部のボランティア組織の整理 ○キャリア教育視点での地域連携 ・「ふるさと」をキーワードにした「探究型授業の研究」で地域連携 ○保幼小中高大連携 ・保幼小交流活動 ・鏡野中との連携 ・山田高校／工科大学との連携 ○PTA活動・参観日で各種アンケートの課題と対策を周知 ○情報発信で改革をアピール ・学校評価でとくに課題となった項目を重点的に	(1)コミュニティ・スクールの組織・ボランティア組織の整備ができた。 (2)学校支援ボランティアの活用者数…のべ300名以上を目標として、教育活動への参画をしていた。(292人) (3)学校支援ボランティアの登録者数…60名以上を目標として募集するとともに、ボランティアバンクをつくる。(63人)	○(1)コミュニティ・スクール設置委員会ができた。平成29年度に向けて実施。 ○(2)学校支援ボランティアの活用者数…(486人) ▽(3)学校支援ボランティアの登録者数…(59人)	コミュニティ・スクール設置推進委員会の今後の活動 ①ビジョンや課題の共有、共通の目標を設定 ②組織づくり(メンバー構成と部会運営) ③教職員や保護者への周知 学校支援ボランティアの数は大幅に伸びた。CS運営協議会設立に向けて、具体的な活動を創っていく。とくに「探究的な授業づくり教育課程研究」と関連させ、総合的な学習の時間や各教科での学習支援を具体的におこしていく。	学校支援ボランティアの登録者数が59人、活用者数が延べ486人に達するなど地域との連携は、大変評価できる。また、コミュニティ・スクール開設の準備も設置委員会ができるなど着実に進んでおり、引き続きの取り組みの継続を望む。一方でPTAに関しては、もう少し保護者が参加していただけるような工夫が必要だと思う。	A

特別支援教育	A	信頼される学校づくりの推進	外部との連携による「チーム山田」の構築	○計画的なアセスメントとケース会の実施 ○支援方法についての研修 ○特別支援学級の授業研究 ○保小連携による早期の見取りと就学支援	(1)特別支援研修のアンケートで研修内容が実践に役立っている…95%以上 (2)特別支援教員用チェックリストで平均が4月より2月が+0.5P	○(1)特別支援研修のアンケートで研修内容が実践に役立っている…100% ○(2)特別支援教員用チェックリストで平均が4月より2月が+0.2Pだったが「学習環境」「指導方法」「個別的配慮」全15項目すべてでプラス評価	教育相談の機能としては十二分に発揮でき、学校外の部署との連携も深くなってきた。来年度もこれを継続する 教職員の関心も高くなり、研修参加も活発になってきている。授業Basicと特別支点的な配慮をベースにして、授業を組み立てるようにしていく。	本年新設された評価項目で、新たに特別支援学級への対応が急務になっている。教職員の研修の参加も活発になっているようで、学校側の体制も整いつつあるように思う。来年は特別支援教室数も増えるようなので更なる体制の構築に取り組んでいただきたい。同時に保小連携及び幼小連携を密に取り、新入生の受け入れのマネジメントも取り組みを深化していただきたいと思う。	S
--------	---	---------------	---------------------	--	---	---	--	---	---